



# 教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1994 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

## 想像を超えた賜

—ベラノ墓地(ローマ)での御ミサで—

★ 今年もローマのこの古いベラノ墓地で聖体祭儀を捧げます。世を去った愛する人々の記念の前日に、私たちは諸聖人を祝い、聖性の秘義について黙想します。

地上を旅する教会にとって今日は特別な日、先に地上を去り、今は「小羊の前に立つ」(黙示録7・9参照)人々を特に身近に感じる日です。この人々の心は神の栄光に満たされています。今日はすばらしい諸聖人の祝日、贖い主の御血によって人類の歴史にもたらされた、救いの成就を記念する日です。

全ての国と民族と民と言葉の、おびただしい大群衆。「この人々は誰か。どこから来たのか。」「彼らは大きな艱難を抜け出た人である。小羊の血で自分たちの

服を洗って白くした。」(黙示録7・9、13、14)

諸聖人の祝日、贖いが成就した日、世の罪を取り除く神の小羊の大きな祝祭の日。

★ 私にとって、今日は忘れられない日です。47年前の諸聖人の祝日に、私はキリストの司祭職の賜を受け、聖体のしもべとなりました。この役務の道を共に歩いてきた人々を、常にかかわらぬ愛をもって思い起こします。彼らと共に、諸聖人の交わりの神秘に一致したいと思えます。

十一月一日、二日の両日に、新司祭となった私は初ミサを立てることができました。司祭叙階中に司教と共に捧げるミサと「自分自身の」と称することのできる初ミサです。ところで、ミサは決して一人のものではありません。ミ

サとは常に、キリストとその神秘体である教会の捧げるいけにえなのです。こうしてミサ聖祭は諸聖人の秘義に深くあずかるための道となります。それはまた「神の顔をしよう」(詩篇24参照)煉獄の靈魂との出会いでもあります。

★ 最初のミサは忘れられない

どのミサ聖祭も、本日の答唱詩篇の言葉を繰り返して宣言していきます。「地とそこにあるもの、世とそこに住む者、すべて主のもの。」(詩篇24・1)そうです。キリストの贖いのいけにえは、全ての人、全てのものに及ぶのです。司祭は自らの限界を知りながらも、絶えず自分をはるかに超えた賜を体験しつつ、ミサ聖祭を捧げます。

★ 死せる全ての信者を記念する日の朝、私は「神のみ顔をしよう」人々と共に、彼らと一致してご聖体を祝うことができました。本日の典礼が強調するように、彼らは「神をそのまま」(Iヨハネ3・2)見えています。

今も心の目に映るのは、故国の

王たち、偉大な指導者たち、預言者の精神を持った人々が眠る、クラクワの司教座聖堂の地下墓所です。この人々の存在と証言は、ちようど聖ペトロ大聖堂を訪れた人なら気づくでしょうが、歴代教皇の墓所からさまざまな形で霊的な力が発せられているように、聖堂中を満たしています。それは全ての国民が時を越えて、教会と共に「ヤコブの神のみ顔」(詩篇24・6参照)を求めてきたことを示す、歴史の証言です。聖アウグスチヌスが喝破したように「人間の心は神のうちに憩うまで安らぎを知らない」(「告白録」1・1)からです。

★ 初めてミサを立てた日のことを、司祭は決して忘れません。ミサは記憶の中だけでなく、きのうも今日も永遠に変わることのないキリストの聖体において永久のものとなっているからです。それは司教の、特にローマ司教の召し出しの基礎として、司祭の役務の中で続けられます。

ここベラノ墓地で聖体のいけにえを捧げながら、ローマ中の全ての墓地とそこに憩う全ての人々をも祈りのうちに含めたいと思えます。「永遠の」と呼ばれるこの町の死者だけでなく、「世とそこに住む者」(詩篇24・1)全て、どこで死に、どこに葬られていようと、時にはふさわしい敬意さえ払われぬままであろうとも。(そのような悲しい例にはこと欠きません。)

キリストの贖いのいけにえはこのように人々全てに及びます。教会が死者のために祈り、このいけにえを捧げるとき、彼らはそこにいけるのです。完全無欠なキリストのいけにえ、同時に全ての人、生ける人と死せる人のための完全無欠ないけにえの内に。

★ 「この人々は誰か。どこから来たのか。」(黙示録7・13)ありとあらゆる所から。「ご主人さま、あなたがそれをご存じです。」(同7・14)どこから来た者であろうと、全員が「小羊の血で自分たちの服を洗って白くした」(7・14)のです。そして今、彼らは皆さんの前にいます。主よ、彼らに御父のみ顔を仰がせたまえ。生ける神を見させたまえ。神をそのままに見させたまえ。アーメン。

(九三・十一・一)

### 月刊誌「教皇様の声」

95年度ご講読お申し込み受付中。

年間購読(毎月1部)送料とも1,600円です。ご住所・お名前をご明記の上、精道教育促進協会宛て郵便振替でお送りください。バックナンバーのお申し込みもお気軽にどうぞ!

# 教皇様との一問一答

(以下は九三年十一月、教皇様がミラノの新聞のインタビューにお答えになった時の模様です。)

——まず、旧ユーゴスラビアの戦争に関する現在の国際情勢からお聞きしたいと思います。バルカン諸国への「人道的介入」についてお話しになったとき、ある人々はそれを軍事介入に向かう傾向と解釈しましたが、正しいでしょうか？

「そうではありません。私は侵略行為の場合、害を与える侵略者の勢力は取り除かれるべきであるという意味で話しました。微妙な違いですが、教会の伝統的な教えによれば、防衛的な戦争だけが正当です。全ての国が自衛する権利を持っています。これは聖アウグスチヌスの教えであり、第二バチカン公会議も確認しています。」

——クウェートからユーゴスラビアに至るまでに、教皇様のお考えは変わったでしょうか？  
「私はいつも戦争反対の立場に立っています。しかし、先にも述べましたが、防衛の意味を持つとき、戦争は正当なものになります。繰り返しますが、誰もが自衛する権利を持っているからです。あなたが言う意味では、私の立場に変化はありません。湾岸戦争の場合、問題は少し異なります。私の考えですが、第二の局面で、あ

の戦争は防衛的ではなくなり、懲罰的な性格を帯びていました。また、地域全体がとても緊迫した空気に包まれ、人々はその戦争を宗教戦争と見なそうとしました。」

「これで聖座の立場がよくわかりただけかと思えます。先に述べたような原則にも、国際社会における特別な使命にも常に一致しています。しかし、バルカン諸国では情勢は異なり、とても重大な問題に直面しています。旧ユーゴスラビアでは共産主義の敗退と共に、急進的な国家主義が復活しました。それは人々を暴力に駆り立て、多くの罪もない人を苦しめています。聖座はいつも、兄弟同士の殺し合いは避けなければならぬという立場を取っています。スロバニア、そしてクロアチア、ボスニアが国民投票を行い、独立の道を選びました。それは正当な権利です。しかし、たとえば連邦政府を作り、新たな解決に向かって平和を維持する方法も最初はありましたが、残念ながら急速に別の方向に進んでしまいました。」

ポーランドはヨーロッパの一員  
——教皇様は教皇になられて以来ずっと人気が上がっています。十五年間も「権能」の座にある

方にとっては珍しい記録です。しかしながら、多くの批判があることも事実です。「自国」ポーランドにおいても批判がありますが、それはなぜでしょうか？  
「今ポーランドではある種のイデオロギーに従うマスメディアが教皇をむしろ批判的に扱おうとしているのは事実です。強調したいのですが、ポーランドのメディア戦略は、カトリック信者である国民全体の真の意向を少しも反映していません。批判的な傾向がどこから来るのかを理解すればわかるでしょう。ヨーロッパと結ばれることが何を意味するかを間違っているとらえているのが原因だと思えます。一九九一年にポーランドを訪問したときにも、またその他の機会にも、この問題に直面しました。確かに、ポーランドがヨーロッパの一員になることに反対ではありませんでしたが、それをある種の理想、誤った理想にしようとする試みには反対でした。この計画の支持者は、ヨーロッパの一員になることで、価値観を持たぬ超自由主義の消費第一体制をポーランドに持ち込み、強力な宣伝を通じて導入しようとしていました。それが始まりだと思えます。」

「実際、ポーランドは改めてヨーロッパに加わる必要はありません。もうすでにヨーロッパの中にいるのですから。ポーランドは、ただ盲目的に西側の風習の最も悪い面をまねるのではなく、自分の価値で判断して一員になるべきなのです。」

「今世紀、共産主義は誰もが知っているあの拘束のない極端な資本主義体制に対する反発として広まりました。レオ十三世の回勅『レールム・ノヴァールム』を読めば当時の労働者の状況がわかりますが、マルクスもそれについて自分のやり方で記述しています。確かにそれが社会の現実でした。極

端な自由主義的資本主義体制が生んだ結果でした。こうして現実に対する反発が現れ、急速に大きくなり、労働者のみならず知識階級の人々からも大いに支持されました。共産主義は生活の質を向上させると多くの人が考えました。その結果、ポーランド人を含む多くの知識人が共産主義勢力に協力しました。しかし、さまざまな点で実際は彼らが考えていたものとは大きく違っていることがわかり、中でも勇敢で誠実な人たちは権力を握っている人々から離れ、反対の立場を取るようになったのです。」

「その点については明確にしなければなりません。単に共産主義に戻ったのではなく、新しい政府の無力さへの反発が起っているのです。驚くべきことではありません。五十年間、政府の組織は唯一共産党だけだったからです。政治がどのように機能し、議会がどのように動くかなどをよく理解しているのは彼らだけでした。今「中央」や「右」と称されている人々は政治を行う準備ができていませんでした。そのような機会はないからです。当時のポーランドの「連帯」に見られたように、反対の立場を取る時には強く一致していましたが、今は分裂してし

「なぜ共産主義は長く続いたのでしょうか？ リトアニアやポーランドでは自由選挙による政権に戻りましたが、西側の一部の国では共産主義がなおあんなに勢力を保っています。これはなぜでしょうか？  
「今世紀、共産主義は誰もが知っているあの拘束のない極端な資本主義体制に対する反発として広まりました。レオ十三世の回勅『レールム・ノヴァールム』を読めば当時の労働者の状況がわかりますが、マルクスもそれについて自分のやり方で記述しています。確かにそれが社会の現実でした。極

世の光イエズス・キリスト

「カトリック教会のカテキズム」要約 Q & A : : : 定価 二二〇〇円 千三〇〇円

「カトリック教会のカテキズム」をともに書き下ろされた、問答形式の要理書。「カトリック教会のカテキズム」の要理書です。

「カトリック教会のカテキズム」の要理書です。

「カトリック教会のカテキズム」のエッセンスを凝縮し、従来の要理書では扱いの少なかった現代的な問題(性倫理など)に明確な指針を下す、実践的なカテキズムです。

「カトリック教会のカテキズム」のエッセンスを凝縮し、従来の要理書では扱いの少なかった現代的な問題(性倫理など)に明確な指針を下す、実践的なカテキズムです。



# 説教・講話・書簡等の抄記

●本紙にただいま連載中の、教皇様による毎週水曜日のカテケージスのお話のうち、「昨年度掲載分までをコピー版で別売しています。」「創造」「撰理」、「イエズス・キリスト」、「贖いと罪」「聖霊」など、1〜3集、送料とも一〇〇〇円〜二二〇〇円。ご希望の方は精道教育促進協会まで。

まっています。それはポーランド人の悪い習慣、昔ながらの欠点、ある意味で極端な個人主義の表れのようなものです。それが社会・政治の場では崩壊と分裂を招きました。何かに反対する時には力を発揮しますが、統治する時、建設的なことを行う時には力を持ちません。」

——精力的に、情熱をもって共産主義と戦ってこられました。現在、自由を得た国々では道徳が退廃し、麻薬と売春が蔓延しています。旧ユーゴスラビアでは戦争が起り、文明の概念が低下しました。共産主義を倒して本当によかったかどうかお考えになったことはあるでしょうか？

「そういう形でこの問題について疑問視するのは間違っていると思います。確かに社会主義、共産主義と言われる不正な全体主義体制と戦うことは筋道の通ったことでした。しかしながらレオ十三世が言ったように、社会主義的計画にもいくつかの「真理の粒」はあるというのも事実です。明らかに、この真理の粒は破壊され、失われるべきではありません。今日、鋭い認識力をもって正確に、客観的に見究めることが必要です。どのような形であれ資本主義の極端な擁護者は、共産主義の成し遂げたよいこと、たとえば失業をなくす努力、貧しい人々への配慮などを無視する傾向があります。確かに現実の社会主義体制下では極端な保護主義のため、かん

ばしくない結果が生じました。個人の企てが姿を消し、不活発と消極性が蔓延しました。その体制が崩壊した今、人々には経験がなく、独力で進むこともできず、個人の責任にも慣れていません。また同時に、崩壊に乗じて経済的な主導権を握り、富を得ようとする人々が現れましたが、彼らがいっつも合法的で誠実であるとは限りません。このような人々の多くは昔の特権支配階級の一員です。」

「ご存じのように、古い体制から新しい体制へと移行するのはとても難しいことです。失業、貧困、失意という高い代償を払わなければなりません。」

——バルト諸国への最近の旅行の途中、リガでマルクス主義にも「真理の核心」はあると言われたのはとても驚きました。

「なにも新しいことではありません。それは教会の社会教説の要素で、レオ十三世も言っています。それを確認するだけです。しかも一般の人々の意見でもありません。共産主義は社会へ関心を向けますが、資本主義はむしろ個人への関心です。しかし先述の通り、現実の社会主義の国々では、社会への関心が高すぎるあまり市民の他の生活分野での衰退という高い代償を払うことになったのです。」

——バルト諸国ご訪問中ビルニウスで、共産主義体制派と反体制派が対峙したことにに関して、

「勝者も敗者もない」とは言え共産主義者は自らの欠点を正し、深く反省すべきであると言われましたが、再び共産主義に戻ろうとする人たちに「ノー」と言われたのでしょうか？

「そうですね。改心し、過去を反省しなければなりません。ポーランドでも他の国々でも、皆がそうしているわけではありません。」

——これまでの話をうかがっている、教皇様は共産主義よりむしろ資本主義に反対しておられるように思えますが？

「ここまでお話ししたことを、ポーランドの詩人ミツキュービチの一節を借りて要約できると思っています。「盲目の剣を罰するのではなく、それを持つ手を罰せよ。」

●9・10 教皇様はクロアチア共和国の首都ザグレブを司牧訪問された。これは、昨年9月のバルト諸国訪問以来1年ぶりの海外訪問である。「私はキリストの福音を告げる、武器を持たぬ巡礼者として参りました。」

ザグレブの空港において立った教皇様の言葉である。「この困難な時に、皆さんが果すべき使命は人と神との和解、人間同士の和解です。教会も社会も、神に身を捧げる人々を必要としていません。それは、現代人がかつてないほど切実に神の必要を感じているからです。」同日、ザグレブの大

つまり、私たちが経験した事柄の原因は何かを見極めなければならぬということ。今日の世界、特にヨーロッパを悩ませている社会問題、人間問題の根底には資本主義の退廃的な側面があります。もちろん、現代の資本主義はレオ十三世の時代のものと同じではありません。社会主義的な考え方によってずいぶん変化しました。今日の資本主義は当時のものとは異なっています。社会に安全弁となるものが導入され、労働組合の努力のおかげで社会政策が実施され、それが国家と労働組合のチェックを受けています。しかし、前世紀のような無制限の状態のまま残っている国もあります。」

——「まだ発見されていない道を探し求めよ」とポーランドの人々におっしゃいましたが、資本主義と社会主義の間の第三の道を探せということでしょうか？

「第三の道がもう一つのユーロピアにならなければいけません。ユーロピアとして共産主義が掲げられ、実践され、悲劇的な失敗に終る一方で、資本主義を経験しました。資本主義は、基本的原理にそって実践されれば、教会の社会教説の見地からも受け入れられるものでした。なぜならレオ十三世も述べているように、それはいろいろな点で自然法にかなっていたからです。しかし残念ながら種々の不正、搾取、暴力、無法な行為が起り、行き過ぎに走りました。資本主義の乱用であり、許されざることです。」(次号に続く)

聖堂で司祭や修道者と夕への祈りを唱えた時のお話である。

●9・11 ザグレブの陸上競技場で大勢の信者と共に平和を祈り、ミサを捧げられる。「この地の全ての信者が、完全な一致を保つて

いた頃のことを思い出します。：バルカン半島の平和を、ユーロピアに終らせてしまつてはなりません。」

連邦を構成していた各民族に共通の遺産であるキリストへの信仰を強調し、戦火に引き裂かれた人々

## 教皇様の動き

●9・18 南イタリアのアブリア地方を司牧訪問された。「仕えるとは、自らをいけにえとして捧げたキリストをまねること。仕えるとは、兄弟姉妹と実際に連帯して生きること。：仕えるとは、寛大かつ自由に、返報を求めず愛することです。」

# 不変の教え

## 女性に固有の資質

▲ 家庭についてのお話を続けておりますが、本日は家庭において特別な、かけがえのない役割を果す女性について考えてみたいと思います。

教会は家庭内での女性にこだわらず、社会のさまざまな分野での女性の活躍を看過している、との非難がありますが、それは違います。市民社会のあらゆる分野で女性の才能が大いに必要とされていることを教会はよく知っていますし、どんな形であれ女性への差別を仕事の場や文化、政治の場からなくすよう主張し続けています。ただし、女性だけの本来の特質を尊重します。男女の役割の画一的な一本化は、社会の衰退を招くだけでなく、結局は女性固有の資質を女性から奪い去ってしまうでしょう。

いろいろな形で暴力や搾取が、ほとんどおおっぴらに女性を商品化し、尊厳を踏みこじっています。許されないことです。(…)世界中の女性の地位を改善するため意を注ぐべきです。それはさておき、母としての女性の使命、人類の運命を左右する重大な使命を無視することはできません。使徒書簡「女性の尊厳と使命」に書いたよう

に、母性を通して神は「人間を特別な方法で女性に託している」(30番参照)と言えます。だからこそ、受胎の瞬間から、まず女性に生命を守るべき責任がまかされているのです。胎内で育つてゆく

(ローマ市内の教会でのミサの説教。召し出しという不思議について、教皇様は原稿なしにその場でお話しになった。)

いま読まれた福音書から、また聖パウロの手紙から、神の言葉は私たちに語りかけています。これから啓示されたみ言葉を聞いて、心動かされずにいられますようか。神は少年サムエルを何度も繰り返しお呼びになりました。「サムエル、サムエル」

ここに深い意味があります。同じことが、同じ奇跡がペトロと兄弟アンドレアにも、ゼベデオの子らにも起りました。召し出しという奇跡です。

今日は召し出しについて考えてみましょう。使徒として、司祭、修道者としての召し出しのみならず、キリスト信者としての召し出し

生命の不思議を、その母親ほどに理解できる者があるでしょうか?不幸にもしばしば女性は困難に見舞われ、母としての務めを果すことが時には英雄的な努力を要するほどの重荷になることもありま

しが意味すること、信者の召し出し、教区の一員としての召し出しについて。(…)

教区の一員であること、この共同体の中でキリスト信者であることは、何を意味するのでしょうか?この素朴な問いかけに答える前に、聖パウロの手紙を注意深く読み直す必要があります。手紙の中

### すべては聖霊の力によって

でパウロは私たち一人ひとりに語りかけています。私たちはそれぞれ一人の男性、女性として共同体をなしていますが、そこには聖霊がお住まいになるのです。これこそ私たちのキリスト信者の召命の源です。聖三位一体が、聖霊の神

合、女性を快楽の対象か子供を生む道具であるかのように思わせる、歪んだ文化が広がっているためです。このような文化の脅威に對して、真の女性解放のためあらゆる努力を傾けねばなりません。しかしそれには、女性の尊厳と同時に、生命を守るという視点が必要です。この二つを両立させなければならぬのです。

▲ 人となられた神の御母マリアは、完全無欠な女性の模

う秘義から召し出しが生じます。聖霊は今も私たちの心の中で働き、男性として、女性として、夫、妻として、父母として、息子、娘として、若者、老人としての尊厳を思い出させてくれます。全ては私たちのうちに住み、神において成長させてくださる聖霊へと向かうのです。

召命はこの世限りではありません。教会の秘義、教区の秘義は、消えることのない永遠の町の市民となるよう、私たちに呼びかけ、急ぎ立てています。つまり私たちはここローマの町で、聖ペトロとパウロが生命を捧げたこの使徒の町で、キリストと共に市民なのです。私たちはローマ市民として、使徒と同じ町の住人、

範です。神が女性のためにお立てになった計画は、マリアにおいて完全に実現しました。世界中の全ての女性、特に母となった人々がマリアに目を向け、使命の偉大さを悟り、それを生きることができ

(八・十四、お告げの祈りの時間に。)

キリストの隣人でもあります。キリストはローマ市民になられたと同時にペトレヘム、ナザレトの、エルサレムの、そして全世界の住人でもあられるからです。キリストはあらゆる町の住人となられたからです。(…)

キリストは、ご自分の民のいる所、たとえ知られぬままであろうと聖霊が働き、人々を神の秘義へと導く所ならどこにでもお住まいになります。キリストはどこにでもおられます。そこに住み、ご自分の肢体、すなわち教会に生命をお与えになります。だからこそ聖霊が教会と、私たちの内に住まうのです。

(九四・一・十六)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡、講義等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年 予約九百円 送料七百円 千部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 01130-8-72393